

昭和二十一年

(一〇七)

合掌 御便有難う。その後御無事御精進で結構です。病氣して御心配かけました。だんくよくなっていますから御安心下さい。

父上母上等、帰られたとのこと、一層、御一同に念仏なくしては立派に生きては行かれませんか。いよく御精進下さいませ。又私の好物をお送り下さったとのこと。幸に入手致しましたから、合掌して頂きます。元氣になり次第、島根にゆきたいとおもいます。待つていて下さい。御念仏の身の幸を忘れないように。父上によろしく、匹見にあいたい。

高島のりがとどきました。有難うございます。

昭和二十一年二月二十二日

住岡夜晃

三浦恒代様

(一〇八)

合掌 度々御便有難う存じます。御病氣も少しは快方にむかっているのでしょうか。例会等有難いお話の時には何時も思い出します。法界には唯「南無阿弥陀仏」御一体真実がましますのです。外は皆そらごとたわごと、仮名の因果のみです。信心安心というも、道と云うも、願と言うも、皆「南無阿弥陀仏」の内容に外なりません。「名号本願」は浄土真宗であります。故に「唯念仏して」と仰せになるのであります。春の聖会にはお出でになるとのこと、待つています。

昭和二十一年三月六日

夜晃

中村正様

(一〇九)

合掌 南無阿弥陀仏

重い病の床にあるお母さん その後御様子は如何ですか。心にかゝりつつ御無沙汰致しました。南無阿弥陀仏。御つらい中からも私を待つて下さるお母様、私もどんなにかお会いしたいことでしょう。春の聖会后疲れやら風邪やらで床についています。それに体の一部に悪いところもあります。その上家内が盲腸が悪くて、十二日弟のつとめている因島の病院に入院する為、出かけまして、帰って来る迄は体はよくなつても出ることが出来なくなりました。生死の苦海はこれがほんとうの相であります。南無阿弥陀仏。

承りませば御食事がとれませぬとのこと、はや子夫人申すまでもありませんがブドウ糖の注射を毎日していきましょうね、注射が動脈でむずかしければ注射液をのんでもいいのです。お母様何とかして頑張ってください。もう一度お合いして御法の御讃嘆をするまでは御浄土に帰ってはなりません。私の体がよくなったら必ずゆきますから、元氣を出して下さい。南無阿弥陀仏。

地上にあるものは何もかもあてになるものはないことが、事がおこればおこつて事がすばめすんでいよいよ明らかになります。念仏のみぞまことにしておわします。南無阿弥陀仏。

この世がどれだけ濁つても、あれても、砕けても、清く静かに、金剛なるものは南無阿弥陀仏のみである。念仏のみぞまことにしておわします。

この世の様につれられて私の心も濁つたり、曇つたり悲しんだり荒れたり、あてにならぬことは空の雲の如くであります。煩惱具足の凡夫とはよくも云われたもの、このどうにもならぬ心を、心のまゝに常照是人と照らし出して撰取して護つて下さるのが南無阿弥陀仏。泥のまゝで南無阿弥陀仏。念仏のみぞまことにしておわします。

もし少しでもよいところがあればそれをたよりにしたり、お六字に足したりして迷うであろうのに。まるた煩惱で迷うことなし。南無阿弥陀仏に毛一本も添えるものなし。念仏のみぞまことにしておわします。

外のことならお礼はこちらで出さねばならぬのに、頂いたままの南無阿弥陀仏がそのままお礼とは、お礼どころか、聞く心も、信ずる心も、よろこぶ心も、みんな皆南無阿弥陀仏の中にある。言葉も絶えた南無阿弥陀仏。天にも地にもたつた一つの南無阿弥陀仏。大手ひろげて南無阿弥陀仏。両手はなして南無阿弥陀仏。うれしくの南無阿弥陀仏。何ともなしに南無阿弥陀仏。泣くまんまで南無阿弥陀仏。辛いまんまで南無阿弥陀仏。称えても南無阿弥陀仏。忘れていても南無阿弥陀仏。とうとう、せんじ詰めたら南無阿弥陀仏がたつた一つ。たつた一つと力んでみなくとも、まことはたつた一つ。このお六字のみが真から性から私のもの。いいかお母さん。広島と浜田と凡夫には遠いが、御智慧の上では紙一重なことです。お六字の中で何時でも会える。命があつたら凡体のままで又会いましょう。命がなければ早く死んだ方が幸いです。もつとも煩惱はそうは云わぬが、では今日はこれでおきます。元氣を出して下さいよ、南無阿弥陀仏。

昭和二十一年四月十三日

夜晃

大島美智法姉

(一一〇)

合掌 南無阿弥陀仏

松中さんこの度は又も大役を果たして頂きまして有難う存じます。一生に度々はない大事に私が行つてやる事が出来ない時、又も貴女がいてやって下さつて、本人

がどれほど心強く手術を受けることが出来たろうかと、誠に恵まれた因縁を喜ばずにはいられない。

昨夜は花岡母子が来た、それに池田と言う法科の学生をつれて来た。昨夜から今朝にかけてはその学生が中心で話した。今日になって古川姉弟が出て来、今午睡から覚めて見ると山口県から兼重うめさんが夫の遺骨（去年燃料廠で爆死）をおともして来ていた。つくづくおもうことではある。業苦は誰にとつても重い、これを人に譲ることも出来ねば、かわつてもらうことも出来ない。出来もしないのにかわつてもらおうとしたり、受けとるまいとすれば、二重の苦を受けなくてはならなくなる。たゞ大地の上では、誰にもかわつてもらうことの出来ないところの身にしむ痛苦の側にあつて、この苦しみに同感し温い心を以つて見守つてくれる人、その人が側にあつてくれることがせめてものたつた一つの救いである。――中止

私は今兼重うめさんに会つた。ただ涙、涙、「よう来たのう」――私の胸中には今の今書いたことだけで胸が一ぱいである――生前、夫が一度本部へお参りすると言つていまして、夢の中で一緒につれてまいりました。去年の五月十一日から先生のことばかり思うて、夢の中にさえ先生におあいして、悲しい一年を過ぎさせて頂きました。嗚呼！大地の上の制約、制約の中にあつて大悲の血涙がそのまゝの中に流れたまいて、前に言うが如く、「誰にもかわつてもらうことの出来ないところの身にしむ痛苦の側にあつて、この苦しみに同感し温い心を以つて見守つてくれる人」この人が如来の大悲と一体である時、受け取る人は涙の中にも大地に於ける極限的幸福を感じるのである。夫の遺骨を捧じて本部に來り念仏して泣きぬれ、今夜の法事にあうことの出来る彼女は幸である。――海外より復員しても誰も待つてくれず、温かき言葉一つ受けることの出來ぬ人たちの不幸が思われる。

業苦の我に向つて同感護念の人を獲る者は、又、業苦の人に対して同感護念の人となり得るであらう。そしてその時はじめて生きることの本質にふれて、ほんとうに自他一如の救い、大悲の御心をふかく頂くことがゆるされるであらう。

三度筆を取る。政治去り、秋作も寝ね、鴨井さんも時計を合せに来て去り、お灸もすんで藤枝さんもゆき、静まりかえつた今、名号を書かんとして机につき、あなたの手紙にも結をしておかねばならぬ、昨日今日の本部は有難いことであつた。しかし大事なことは、二本の手紙の内容となつている。政治から更にくわしく聞いて下さい。政治のようないゝ子が来るような日は、私の胸も開いて、遅々として進まぬ私の足どりも少しははつきりとするようである。有難いこと。

皆様にくれぐれよろしく、病室にはおぼばんがいられるとのこと、山々お礼を言つて下さい。

ではよろしく願ひします。

昭和二十一年四月二十三日夜

松中まさ子株

夜晃

絹への手紙は苦しいようだったら楽になった時見せて下さい。
あんたの手紙に書いてあることは大地の人と人との間の生活の原理だとおもうからよく読んで下さい。

(昭和二十一年春、因島病院へ入院中の夫人へー以下二八まで)

(一一一)

合掌 二人の手紙が一度に来ました。一昨日二十日、手術を受けたとのこと、安心したものゝ、今日あたりまだ重湯を頂く位で体が苦しいことであろう。しかし一昨夜よりは今日と、苦しみが少しでも軽くなっておれかしと唯念じている。そしてこの手紙が届く頃にはもう五日目か六日目で、順に行けばうんと楽になつていて、この便が読めるであろうと思ひ、今日も夕方までかかつて色々書いて行くであろう。

義彦君この度は誠に有難う。何もかも安心して君に托していられた精神的な賜を誠に有難くおもいました。一切に対して不安を持たないでいられるということほど、大きな御恩はないことをこの度真に感じました。厚くお礼申します。

如来は私の精神界に影現して、盡十方無碍の光を放ち、私に念仏を廻向し、信心を顕現せしめ、やがて念仏の我を撰取不捨したまうこと、これによつて私は私の精神界の根本の不安を取り除き、安心に致らしめ、安養したまうこと、誠に有難いことである。よつて大経には上巻の結尾に各々安立於仏正道と示したまい、蓮師は当流の安心と仰せられた。

誠に念仏の撰取不捨なければ事毎に不安動揺、生死の波に翻弄せられて、三界無安猶如火宅の法華経の御文の通りであろう。精神界に安らぎを与えたまう大悲の広大、静かに病床に憶念なさい。そして御念仏申しなさい。

今はもう業として受け取らして頂いた後の静かな感謝と安らぎとかすかなる喜びとがあるであろう。その感謝の心、歓喜の心、その中に、聖人の仰せたる「撰取不捨の故に正定聚に住す」る有難さを頂くがいゝ。本来ましますものは無縁の大悲の撰取不捨だけであることは、聖会で幾度も聞く聞いた通りである。あとはただ生死無常煩惱の雲霧の去来あるのみである。実在するものは如来本願撰取不捨の真実のみ。

…… (十二行削除) ……

二代主管と云うことになるかと私はそれを思う度に肅然として襟を正し、白紙にむかつて合掌せる人の如く、全く聖旨の如くと願する私の意を知つていてのことであるのか。「二代主管を賜りませ。」それさえ願うべからざることである。しかもそれが凡夫の私の必然の願でありつゝ……かつて二十周年の奉白文に「もし聖意にかなえば光明団をあらしめたまえ。」御意にかなはずば即時に消滅せしめたまえ、と申しておいたが、今もその心が変わりはない。「二代主管」と私の心に浮ぶ度に、私の心は大悲の御前にきつきゆう如としてひれ伏す思ひである。

…(十六行削除) …

このことを通してこのことに関する私の心を語り、念仏の生活への具体化の問題の一例として、参考にまでと思つて書いたのである。

白紙に出てくる宿業の相と、本願の御はからいとを拝もうとはせず、高上りして自ら白紙に書かんとする。何たる驕慢ぞ、邪見ぞ！ 嗚呼、頭の中に御法とままりて、胸中に下りてやがて全我の事実とならず。聖人晩年ただ御はからいにまかせよとのみ仰せたまう。朝事で毎日この御心を頂くことではある。(おはからいにまかせよとは、まかせて御はからいの尊さ、たしかさを信管しんしやうした人のみ言である。)

至純なる願心、至心の願心のみが一切を如来の御はからいに托し、托してはじめて金剛不壊の大悲を信じ得るのであろう。

お前と播いた種子、胡瓜がきれいに芽を出したと思つたら全部雀にきられてしまつた。なんばんきびも大分やられた。南京はまだ出ぬ、なすも然り。たかなはとうが立ちはじめ、えんどうはいよく勢よし。おぢやがの芽大きくなるにつれて数本のもは一本とし、まびきを芽の出ぬところに植えている。きうりの種をどうにかせねばならぬ。

毎夜七時半から勤行、正信偈三首引、御法話がすんで八時半から八時四十分頃、静かに耳をすませ。勤行が聞えるであろう。聞書は今晩は七五、七六章「弥陀をたのめとは阿弥陀如来の仰せである」ことを頂く、これは十八願の意である。人間の言葉を聞いていては駄目、弥陀の直説を聞かせて頂かねばならぬ。

5

広安の姉上も御苦勞下さつたとのこと、いられたらよろしく云つてくれ。

希くば病室に浄土の香りたゞよい、自他一切をこの逆境を通して如来の光明照したまわんことを、順逆善悪全てみ光によつて転成したまうことを身を以て体験したまえかし。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

おばばん、お母様、有難う御座います。こちらからは松中さんに代つてもらつて出て行けなくて、お二人に心配かけます。早くみ仏様が会わせて下さればと、そのみおもいます。

もう紙が無くなったから今日はこれでおきます。皆様お念仏のみです。さよなら

四月二十二日

夜晃

絹家どの

(一一一)

合掌 今日手術後七日目だから大分よくなつていゝであろうか。万一のことがあつて苦しんでいはずまいかと毎日案じています。もし順普に進んでいゝとしたら、あの二通の便をとり出して幾度も読んでくれることだろうとおもつたりする。

本部には毎日お客様がある。昨日は宮原のおばさんがチリ紙を持って来て長い間話して帰られた。お説教ばかり聞いていても具体的な問題は一つも解決の出来ないものらしい。

今朝早く細川君が三四日の予定で九州へ、午後花田君が一郎氏の招喚で岡山へ、古ちゃんは二十八日帰るとのこと、今日午後美津子も帰って行った

……(四行例除)……

宿善のこともおもうと有難くそして悲しくなる。何もかもどうにも出来ない。出来ないのに出来ると思つてゐるのは、ガラスの金魚鉢の中を金魚が泳いでいるのと大差はない。

昨夜も今晚も「弥陀をたのめと御教へ候人は阿弥陀如来にて候」とある章である。弥陀の直説ということである。我等は地上応現の人の教説を聞くのではあるが、それがそのまま弥陀の直説と頂かれるところに十八願の信心がある。この心はいと細やかなる美しき心である。

人間の貪欲瞋恚は誠に荒々麁悪なるものであり、この直説の聞こえて下さる心には到底愚痴などを入れ、さしはさむことの出来ない尊い心である。信心歓喜と言われるのはこの世界である。どんなにどんより曇つた嫌な心でも、この直説の聞こえて下さる世界に転入した刹那、明朗な心として頂く、それ故に人は御法の席に出て来るのである。しかしいくら御法を聞いても概念となると言うのは、直説の聞こえる天地に出して頂くことが出来ないのである。

朝一人で末燈抄を頂いているが、頂く通り頂けてハイの返事すら間に合わないのは、聞く通りの、み言葉通りの心を廻向されるが故である。真に弥陀の直説である。

南京が大きな芽を出しはじめた。本年は山百合の芽が三四本出たので喜んでゐる。えんどうがなりはじめた。今朝一つたべて見る。実のないのを。

飯室にこの間のすりものを末田登、吉政清、古政吉太郎の三人あてで出したら、末田君は(支部長だった人)去年死に、清君は去年満州に開拓団でゆき、残つた吉太郎氏はすでに七十歳だと言うて来た。愕然として人生のさびしさに身ぶるいした。

人は死ぬる。世尊は最後まで諸行無常を教えたまうた。さびしくてもそれが人生の実相である。南無阿弥陀仏のみが一つ光り輝いて下さる(近頃涅槃繋経など頂いて)聞けどく、語れどく、自分の前に現われて来るものは自分自身の業の相、自分の心の影とわからない。邪見が深くなればなるだけそれがわからなくなる。

念仏しながら、有難うございます、という言葉が一つ現われたら、その人の過去の全てを生かすのであり、同時にその周囲の全てを生かしている。そこに輝くものはたった一つの光である。もし愚痴が一口出て来ると、我と自ら自分の一生に墨をぬるのであり、同時にその周囲を殺すのである。耳をすませて聞くと人は時にこのおそろしい言葉を出す。有難うございますという言葉は頭の中からは出ないものである。

……(六行削除)……

口はおそろしいものである。沈黙は銀、念仏は金。高上りした言葉は自らをくそつぽの中におくのである。お互に気をつけさせて頂かう。

田畑君、手紙の中に言く「私はよくこの頃仏御在世に生れ合わせて頂いた気がしてなりません。嗚呼亦今夜も、一人でそこぬけ喜び、涙と共に感謝させて頂くばかりで御座います。」私の胸からも熱いものがこみあげて来る。

世は全て青葉若葉となった。ふと何心なく見ているとこの世このままがお浄土のような気がする。それがそうでないのは、敗戦だ、病気だ、愛憎だ、食うこと着ること等々、無明をおつかぶせて見ているから生死の苦海なのだとしみじみ思うことである。三界流転の本源は外にはない、外にはない。

今日も毎日少しづつ快くなるのは嬉しいものであろう。松中さんのいわゆる厚皮をへぐように。心の相もそうであらう、信心歓喜と言うのは光が光って見えることである。

五月の例会が来る。「久遠実成」「十劫正覚」の問題である。有難いことがあつたら書いておく。

そちらからも様子をせよ。

明日は早枝子が見舞にゆくと言うからこの手紙も持つてゆかせる。念仏申すこと。本部をはなれていれば却ってお念仏をよく申せるかも知れぬ。

おじやがも太る、めうがも芽を出した。帰って来る頃にはすつかり違っているであろう。明日は抜糸の日だ、そろ／＼起きて座ることが出来るようになるだろう。では食べすぎぬように気をつけて、ゆつくり養生して一日も早く帰れよ。

政治は例会に帰ると言っていたが、多分、松中さんと一緒だろうが、必ず来いと書いてくれ。

四月二十七日

夜晃

絹どの

(一一三)

合掌 南無阿弥陀仏

有難い五月の例会が終りをつげた。お前が居ないので何かさびしく、からつぽな気がする。今日は体も疲れているが政治が発する迄にとおもつて机につく。

この度の例会、はじめは大変さびしいようであつたが、だんだん人が増して後には盛会(五十人位)であつた。宮原にははじめおぼさんが参つて来た。主人も嫁さんも参つた。天津から帰られた四田さん、加計からは平田屋のおぼさん、田坂将さん、さては岩国の武田が八十八歳の老婆を連れて来たり、なかなかの多彩、師範からも夜は大勢来た。

お話は「塵点久遠劫よりもひさしき仏とみえたまう」の和讃。久しぶりに「久遠」の大文字について心ゆくばかり頂いた。今日一日病室を静かにして政治から聞けるだけ聞くこと。久遠なるものとは真実なるものということ、この度ほど久遠の文字の上には真実ということを頂いたことはない。錠光如来の上には弥陀の御生命が輝いてい

なさるのである。何故、大経正宗分の和讃の最初にこの久遠実成の和讃を出されるのであるか。それは正宗分において説かれる法蔵菩薩が、従果向因の菩薩たることを示さんがためである。如来は衆生の無有出離之縁の業苦に大悲同感して、大悲にひかれて従果向因する。無有出離之縁とは「タスカルテガカリノナイ」ことである。助かる手がかりのないものを助ける大慈悲である。

直心、菩薩は合掌帰依する。この合掌の相こそは菩薩の正しい相である。磁石の針が南北をさすが如く、合掌の心はそれ自体汝の心霊の故郷に向う。この正しい相において久遠の法蔵の扉は開き、無限の宝蔵は菩薩の上に自利成就せしめる。これ即ち直心である。直心即ち「まごころ」である。まごころ（至心）とは誠にこのことである。心霊の故郷たる浄土にかようこの心より他に真実心あることなし。この真心において成就せる自利は、そのまゝ大悲廻向となつて無有出離之縁の衆生の上に利他成就する。この自利利他一如の心―即ち深心である。深心とは菩薩金剛の信心である。よくよく味わうべし。この深心の両面を、直心といい、大悲廻向の心という。こゝに法蔵の本願が四十八願と具体化したまうのである。

第二日朝より夜までこの話―

噫、久遠とは真実それ自体であり、それ故に真実にむかう合掌帰依の直心（至心信樂）も亦大地の上における唯一の真実それ自身である。至心信樂唯念仏申すべきである。

傷の痛みは無くなつたであろうか。無熱になつたであろうか。食欲は出たであろうか。毎日様子知らせて欲しい。松中さんにそちらの委細の様子を聞く。唯感謝の他なし。前田国手にはいづれお礼の書状差し出すはず。其他全て勿体なし。おぼばんお疲れは出ませぬか。御苦労かけます。長い間お会い致しませんね。厚くお礼申し上げます。

南京が芽を出したが種類によつては一本も出んのもある。きょうりも雀にやられた。残が大分生えた。世はいよゝ／＼初夏の嬉しい若縁になつた、一日も早く快くなつて帰つて来い、何もかも皆待つている。今晚は松村さんが来ていて大野の法事に合わずに帰るといふから、念仏の姉妹の為に御法事をさせて頂く。何時の日に仏様は私を因島につれて行つて下さらう。皆様さようなら。

五月四日

絹さん

夜晃

(一一四)

合掌 その後の様子がないので一同心配している。熱が下らないのではあるまいか、食欲が出て来ないで衰弱したのではあるまいか等と心配しています。どうか誰からでもいいから、はがきでいい、様子を知らせてくれ。

敬三も肺炎をやった後がいろいろ悪くて起きられないそうである。秋作は帰らぬ日も沢山あるがよく精進している。先日は有難い御見舞状を送つたとのこと。

今日は吉見君は台所に使う栗の柱を作っている。栗栖実さんところから立派な栗の木をもらった。二日に木材が帰った。鴨井さんはおじやがの中耕、松中さんは芽の出た小さいのを植えている。鳴戸のおぢが胡瓜の苗（五木二円）を売りに来ている。いちごが実った。えんどうも実った。きゅうりも後から大分生えた。南京は種類によっては一本も生えない。何もかも絹をよんでいる。

特に親様が待つていられる。親様の本部はピカのおかげで堅くなる。セメントも加計の心配で三袋は入った、台所の大改造（早く帰って計画を言うこと）も皆聖会の準備。風呂も位置をかえてもらう。

師範の加川も上田も家から通うことになった。来ようと思つても入れようと思つても結局因縁がなければどうにもならない。

……（二行削除）……

昨夜の法話は「弥陀をたのむ機は如来のよくしろし召すなり。如来のしろし召すように生きてゆけ」であった。これがたつた一つの生き方であるが、親様の喜んで知らし召すようには、到底自力では生きられぬ。この文の心はすなおに念仏申させて頂くことである。

桃の木のところのつつじが美事に咲いている。山百合も小さい雷をつけている。大自然の親の相そのままに生きる草木を見て、私のすなおに念仏申さぬ相に涙がこぼれる。雑草（人間の勝手の名だ）をぬくことも時に相すまぬ気になる。

花田君が街から持つて帰った大きな柳が芽を出していたので、鴨井さんと土に埋めて見た、根が出るかどうか。人間は恥しいことだ。何と言う横着な存在であろう。今日で手術を受けて十八日目になる、順に行けば退院している筈であるが、どうしたであろうか、しばらく別れているさびしさが、永遠の別れのことを思わせる。俱会一処の御誓がなかつたら到底生きられるものではない。

善悪の裁きの前には一つになれる世界はない。この頃しみじみ思うことである。

〇〇は〇〇で親から見ればいい子である。

……（五行削除）……

真つ青になつて心配しつつ、子供のために弁解してやりつつ、矢張りいい子である。それでよいのだ。噫、経の「善男子善女人」のお言葉。無有出離之縁の我が念仏するだけで正定聚の菩薩であり、諸仏同等の希有人である。それが大悲の御心だ。人を見るに善悪の裁きから遠ざからして頂き度い。

聖人の御消息を頂いておると「はからいをすてる」ことばかり説いていられる。御はからいが御はからいと頂けるような生活、そういう毎日を送らして頂かねばならない。たんごの鯉幟が風に吹き流されている。しかし一本の釘が立っているのは台風が吹いても動きはしない。自力がすたらないと正法の聖会にあつてさえ喜びは感じられない。

人の言うことと思うこと、毒々しい言葉や思いの底には必ず自力がある。美しい言葉や思いの底には必ず大悲誓願がある。今の今もそのことばかり心にひびく。毒々しい言葉、毒々しい思い、それが自他を傷つける。愚痴を言うな、念仏申せ。人を裁くな、批判は違う。唯念仏して大悲の御心に帰れ。じつと静かに内に帰り、自己を超え

て念仏申せ。私は私に言つて聞かせる。大悲の御心のみが三世を貫く。私は仏の一人子だ。誰が何であろうと私は念仏させて頂く。光そのものだった世尊、御念仏そのものだった聖人、小さくても如来聖人の真仏弟子にして頂かねばならぬ。今日も亦暮れてゆく、裏の道では六時になるのに吉見君の斧の音が聞える。唯念仏申すこと

……(七行削除)……

五月七日 夜晷

絹どの

(二二五)

合掌……(別行)……

御法がないと心に垢がつく。あまりつくと垢がついた事さえわからなくなる。御念仏申す事だ。

感謝のない生活程重荷はない。感謝のない時は久遠劫来の無明に頭をつき込んで、我がものを言っているのだから、早く光明の天地に出してもらおうこと。

親をよぶ声、親をたづね呼ぶ声、其の声が小さい、足りない、そして無い。念仏とは、衆生の親を呼ぶ声である。衆生貪瞋煩惱中に清浄願往生心を生ずるとは、衆生の親を呼ぶ声である。願往生心とは親を呼ぶ衆生の心である。然るに御親は欲生我国と衆生を呼びたもう声である。この欲生我国は衆生にあつては願生彼国の願である。欲生我国がそのまま願生彼国、即ち願往生心である。願生彼国がそのまま、欲生我国である。であるから衆生の親をよぶ声は、そのままが衆生をよぶ声である。衆生の親を呼ぶ声がそのまま親によばれているのである。これが即ち南無阿弥陀仏である。

仏様は外から呼んで居なさるのではない、内に呼んでいなさるのである。信の内に奥に仏様がいなさり、御浄土が実在するのである。であるから正しい信は、信が信自体を内に内にと求め、如来を内に求めて、この信の内容が仏の本願であることを知るのである。誠に信は何物も外に求めない。信が外に結果を求めるを迷信と言うのである。正信は内に求め、迷信は外に求める。果を外に求める心は、仏を求めてはいない。それ故に信が信自身に満足することが出来ない。真実の信は信自身に満足する。念仏は念仏自身に満足する。噫。信が信自身に満足し、念仏が念仏自身に満足するが故に信心歓喜と云われるのである。

以上は去る土曜日に師範の生徒らに対して語った話の大体である。

今夜十六日晚は亡き同胞の仏事をさせて頂き、御供養の御礼の仏事をも兼ねてさせて頂いたことである。

絹の病床の豊らかならん事を切念する事である。感謝の心なく、我のみものを云えば、如何に物質には恵まれていても、暗い貧しい世界となる。

お母さんや、おばばんがいられるから御讚嘆の華咲く豊かなこととは思いますが、どうか御念仏申してくれ。御念仏の中で毎日会わせて頂く。

五月十六日 夜晃
絹どの

(一一六)

合掌 お前の有難い手紙を受け取って誠に嬉しく拝見した。何よりも御念仏に生きてくれる事を有難く思う。こうして別れて居ていよいよ一味一体である事を味わせて頂くことは有難い事である。御本願のおかげである

……(削行)……

御誕生の御話は「竊以難思弘誓度難度海大船」総序の初一節が題で、主として「度」の一字について語る。仏教の眼目は何であるかと言うと、それは「度」の一字につき。生死の海を度つて、迷いの此岸より悟りの彼岸に到る事、聖道門と云わず浄土門と云わず、全てこの「度」の一字の実現が仏法である。六度の行などと云われるは自力によつて度せんとするのである。然らば度するとは一体何か。自度することである。自ら度するとは菩薩行を行じて仏の正覚に至ることである。然るにかゝる自度は如何にして成就するか、それは一切衆生を度すること、則ち度他によつてのみ自度する事が出来る。然らば度他は如何にして成就するか、それは自度によるので、自度は度他によつて成じ、度他は自度によつて成ず。然らば自度する事能わざるものは度他する事能わず、度他する事能わざるものは自度することが出来ぬ、この循環論法によつて遂に自ら解決する事が出来ぬのが我等の現実である。

聖人二十年の修行も遂にこの「度」の一字を体現したまう事が出来なかつたのである。然るに難思弘誓は難度海を度する大船、本願を信じ、本願に乗托して唯、願生の一道にあれば、本願力の徳としてこの解決すべからざる「度」の問題を解決して下さるのである。即ち大信心は願作仏心であり、願作仏心は度衆生心であるとの、あの平生幾度も聞いたあの浄土の大菩提心がそれである。この世を過ぎたのが度つたのではない。難度海とは理想の彼岸に至ろうとする時、至る事の出来ぬ生死海である。誠に本願はこの難度海を度らせて下さるのである。願生彼国する事、招喚のまゝに念仏する事、それによつてこの生きることの第一義の問題が解決せられるのは聖人御出世の賜である。聖人御出世なくば我等は生死界に常没常流転の身であることさえ知らずして流転するところであつた。之れが御話の要点であつた。

(以下別行)……

昨夜と今朝、神野らが来ているので有難い話であつたが書く暇がない。皆様によるしく。

五月二十五日 夜晃
絹どの

(一一七)

合掌……(削行)……

この頃の夜のお話は聞書の「聖教読みの聖教よまずあり、聖教よまずの聖教よみあり。」の章を頂いている。我等が教法を聞くことは伝統の教を聞くことである。然るにこの伝統の教は、唯頭だけで受け取ることが出来る。彼の二河白道において三定死の行きづまりにおいて、無有出離之縁の内観深信において、はじめて聞くものは発遣の教えである。「汝決定してこの道を尋ねて行け！ 必ず死の難無けん。もしとどまれば即ち死せん。」心をひそめて頂け、発遣の声とは唯一の師の教命である。伝統は死物であり、発遣の声は生きたる人格の直接の意志表示である。「汝この道―念仏―たづねてゆけ。」行け、行けである。キリスト、日蓮、全て聖道門の教は「我に來れ」であり、我が教主善知識の教は「行け」である。この「行け」の声の聞ゆるところ即ち白道忽ちに開けて、我をして水火二河の中に更生せしめたまうのである。

伝統は古く、発遣の教は新らしく、今、行者の背後にあり。「この上は念仏をとりて信じたてまつらんとも、捨てんとも、めんくの御はからいなり」と、唯一の師教は絹をして、教権への屈従、盲従、妥協、反逆等の一切より解放して、自由の境にあらせつつ、然も信順するより外に道なからしめたまうもの、即ち発遣である。今行者は古き伝統の中に、新らしき発遣を聞く、之れを自覚即ち信心と云うのである。発遣を聞く者は同時に招喚を聞く、もし発遣を聞くが如くにして同時に招喚を聞かざる者は、直に発遣を聞いたのではない。噫。伝統の教学を聞くこと久しくとも、遂に発遣を聞かざるものは常に傲慢を生じて名利と相応し、聖教をよんで聖教を読まざるものである。(二三日前この事、発遣の事を新に頂いて嬉しき云わん方なし、よく熟読がん味せよ) (以下削行) ……

五月二十七日 夜晃

絹どの

(二二八)

合掌

……(削行)……

御法。私は近頃こんな気がする。私は一人しかいない様だが、そうではなくして、沢山な私がいる。煙草をすっている私、作物に水をやっている私、御聖教を頂く私、念仏する私等々々、私の前に私があり、その前に、その外に私があり、その外に私がおる。又私の内に私があり、その奥に私があり、その奥に……そして、その奥の奥に如来がまします。弥陀は私ではない。確かに私ではない。しかしその私でない如来が私よりもつと私に近い私であることは常に聞く通りだ。この外の私が小さい私、内の奥の私が大きい私である。邪見な人と云うのは、他人の上はこの小さい我を引き出すことの上手な人のことである。有難い人、尊い人と感ぜられる人は私の内の私、大きな私を引き出してくれる人の事である。我が感動する場合は何時も私の上に大

きい私、内なる我を引出してくれる場合である。新聞紙をよんでいる時でもその通りである。

御教を聞けば満足し、歓喜し、感動するのはこの内なる我を発見せしめられるからである。この教法によつて内に／＼と覚めるものは、又同時に外へ外へと小さい自己、きたない自己、畜生の自己、餓鬼の自己、遂に必墮無間、無有出離之縁の自己を発見する。しかしその時、又、内なる極限たる弥陀の本願にあうので、この光があつて始めて暗がわかるのである。

聖賢はこの光と暗との幅員、即ち深さの深い人である。何等の深さを持たない人、魚釣りや煙草吸いや、名誉地位の人ほど気の毒な人はない、物思われる言葉ではある。(或夜の法話) (以下削行) ……

六月四日 夜晃
絹どの

(二一九)

合掌 その後どうだろうかと案じていましたが肺炎の爾後不良にて諸症状併発と
のこと心配しています。鶴枝さんがいるのだからぬかりはないことながら十分気長
に養生して一日も早く御全快下さい。会座の度に待つのも苦しいことです。絹は四
月二十日に土生町因島病院にて手術を受けました。松中さんがついてゆきましたが13
経過良好とのこと御安心下さい。手術を下さつた前田国手は未だ三十台の人な
れども、数百回手術の経験ある人にて義彦の一の友達だそうで何かと親切にして下さ
れ、絹は義彦の姉とて、病院も殆んど無料、その上前田先生に対する謝礼もどうして
も取られず、何か先生(私のこと)の書かれたものを頂きたいとの所望、又、「自分
は師を求むれども未だ得ず」として私に会い正法を聞きたいと求めておられるとこの
と、抜糸後帰つた松中さんは、唯涙と感激のうづまきを持って帰りました。

幸とは悪業を、のつびきならぬ悪業を、善果の中に受け取らして頂くこと、絹はこ
の私の定義をいやと言うほど昧っているようです。久遠劫来の無有出離之縁の悪業
を南無阿弥陀仏の大善業の中に受け取らして頂くところに念仏の子の幸がある。

秋作はあれ以来ずっと陽つづきで本部から通っている。随つて大変有難く変つて
ゆくようである。「兄さん、以前は大勢の前で大声叱咤した後は何とも云えぬ淋しき
があつたが此頃はそれがなくなりました。どうしてでしょう。」「如是我聞と師のあ
る者にはそのさびしきはない。以前には師がいなかつたのであろう。」「静かに大地を
ふみしめて歩んでいる。それ故に甚だ人の目につく存在らしい。」「校長、お前は近頃、
お前が居ると其の周囲を静め、おちつかすことが出来るようになったようだ。いよいよ
念仏して内観をおこたらぬように。」「言つたことだ。

五月の例会は「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とときたれど 塵点久遠劫より
も云々」の和讃をいただきかけた。有難さ云わん方なし。初めは少人数のようであつ

たが後には五六十名の盛会であつた。久しぶりに久遠実成の親様に遇い、その嬉しき唯念仏して報謝せずんばあるべからず。

げに大経正宗分十三首の和讃の最初に、弥陀塵点久遠の説を出したまうは聖人の信において感得したまうことに外ならぬも、何故にこれを出したまうや。そは実に次に説かるる法蔵菩薩の常の菩薩にあらずして、実に従果向因の大菩薩たることを示さんとせられるのである。従果向因の菩薩は、そのあるべき正しき相においてその久遠の故郷にむかつて帰依合掌する。この正しき相においてはじめて久遠真證の法蔵は開かれて、自利、上求菩提の満足を得る。正しき相とは真心のことである。この真心即ち觀經においては至誠心、大経においては至心、即ちこれを真心と言う。これより外に真心を求むること勿れ。然るに、真心とは実に「久遠」なるものである。久遠の實在にあらずして何処に真実なるものがあり得よう、そもく久遠実成のみ親、従果向因したまうは何故ぞ、そは実に、無有出離之縁の群生(我)の業苦によつて引出され、それ故に無有出離之縁の運命を我が運命として、「タスカルテガカリノナイモノ」を助けたまわんがための大悲廻向心、即ち従果向因の動機である。この自利利他一如の深心、即ち金剛の信心に本願が具象されるのである。……これは、これ位でおく。次が聞きたければ早く快くなつて帰つて来ること。長くなつた、今日はこれでおく。お大事に。

昭和二十一年五月六日 兄より

蘇晃君

(一一〇)

合掌

先以つて御念仏が称えられますか。御念仏は諸仏證誠のみことをもて唯一絶対の真実の不行。これあらば生き、これなければ妄想の広海に死ぬ。

「親鸞におきてはたゞ念仏して。」(この一句につき二月の例会には三日間を費して語れども未だ尽きず、それより後もスルメを口に入れたるが如し。)
「たゞ」は唯一絶対、即ちこの「たゞ」、親鸞と念仏とを一如にしつゝ、親鸞を限定し、念仏を限定する。「たゞ」の文字の背後には如来広大の本願ありて光る。即ち選択本願ありて八万四千の定散諸善を廃捨せしめて、本願の不行を選択せしめたまう。「たゞ」とは選択本願である。浄土真宗である。「選択本願は浄土真宗なり。」(二一ノ二)

親鸞におきては唯念仏する、唯念仏するところに光るものは信心の智慧である。この光、内觀の心を照して無有出離之縁の相を深信せしめ、やがて久遠劫来の宿業に没在せしめてこれを荷負せしめ、一切衆生の代表者たらしめて、念仏行をして全人の行たらしめたまう。

無有出離之縁の内觀なくしてどうして唯念仏の境が現前するであろう。病の床にあつて却つて無有出離之縁(タスカルテガカリノナイコト)の運命を知つて仏の正道に安立せしめたまへ。仏の大悲は無有出離之縁の大悲である。「選択本願は浄土真宗な

り。」真宗いづくにありや、唯念仏にあり、唯信心にあり、誠に信の内奥にあつて無限なるもの即ち浄土真宗。教を聞くも信ずるも行ずるも、本願の廻向、されば信、信を求め、称、称を求めて果を外に追わず、(昭和の大悲劇は、神を信じて戦勝を外に求むる迷信にはじまつて、やがて、神の崩壊によりておわる。民族の迷信亡んで所を失い、真神を知らずして右左に振動す。文化のレベル南洋土人の位にして、これを如何ともする術なし、我が此頃の暗涙)従つて信、信に満足し、称、称に満足す。信を証明するものは信なり、称を証明するものは称なり。それがそれ自体を証明するものこれを「真実」と言う。

かるが故に君、静かに外に何もものをも求むるなく「すかされたてまつりて」地獄におつとも念仏申したまえかし。念仏は本願の行である。如来それ自体の廻向表現である。親鸞と唯と念仏と三つあるが如きは概念のみ、親鸞即ち唯、親鸞即念仏、念仏即親鸞、念仏即正、正即念仏なるを「たゞ」と言う。

この唯行は親鸞の信である前に唯一の師教の発遣のみこと、「汝この道を尋ねて行け！ 必ず死の離無けん。とゞまれば即ち死せん。」

(昨今の話は聞書の「聖教読みの聖教読まずあり云々：。」我等は教を聞くに伝統を聞く、然るに伝統の教はこれを単なる頭脳を以つて受け取ることが出来る。然るに行者三定死のどん底に立ちてはじめて発遣の声を伝統の中に聞く、発遣は「汝！ 行け」の教命なり。伝統は死物、発遣は生きたる声、伝統は古きもの、発遣は今此処にある。唯一の師教の意志表示、必然の信順のみある教命、二三日前、この伝統と発遣の交渉を知つて嬉しきこと限りなし。)

師の一生をかたむけて選択本願念仏を明かにして、これを賜う。されば「弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せをかうぶりて信ずる外に別の仔細なきなり。」

唯一の師教「この上は念仏をとりて信じたてまつらんともすてんともめん／＼のおんはからいなり。」と我等を盲従、屈従、妥協、反逆等の牢獄より自由の天地に解放してしかも、信ずるより外に道なからしめたまう。身の幸喜ぶべし。生死海に満足あることなし、信の内面に満足あり。

信じて称ふるものは願生彼国の道にあり、願生浄土は選択本願の原理、されば願生彼国の道にあるものは、求めず期せざるに無限の徳の廻向によつて一切の問題自然に解決成満す。誤つて聖道の子となつて個々の道を個々に解決せんとするなかれ。例えば、自利、利他の問題の如きも唯、願往生心に於いて自ら解決す。その他一切は願生浄土に於いてのみ与えられ、解決せられるが本願の徳である。今日はこれにて擱筆します。御念仏申しませう、御大事に養生肝要、南無阿弥陀仏。

昭和二十一年五月二十七日 夜晃

中村正様

合掌、まず以つて御念仏が称えられますか。御念仏は諸仏證誠のみこと、唯一絶対の真実の不行。これあれば生き、これなければ妄想の広海に死ぬ。親鸞におきては「たゞ念仏して。」（この一句につき二月の例会には三日間を費して語れども未だ尽きず、それより後もスルメを口に入れたるが如し。）「たゞ」は唯一絶対、即ちこの「たゞ」、親鸞と念仏とを一如にしつゝ、親鸞を限定し、念仏を限定する。「たゞ」の文字の背後には如来広大の本願ありて光る。即ち選択本願ありて八万四千の定散諸善を廃捨せしめて、本願の不行を選択せしめたまう。「たゞ」とは選択本願である。浄土真実である。

親鸞におきては唯念仏する、唯念仏するところに光るものは信心の智慧である。この光、内観の心を照して無有出離之縁の相を深信せしめ、やがて久遠劫来の宿業に没在せしめてこれを荷負せしめ、一切衆生の代表者たらしめて、念仏行をして全人の行たらしめたまう。

無有出離之縁の内観なくしてどうして唯念仏の境が現前するであろう。病の床にあつて却つて無有出離之縁（タスカルテガリノナイコト）の運命を知つて仏の正道に安立せしめたまへ。仏の大悲は無有出離之縁の大悲である。「選択本願は浄土真宗なり。」真宗いづくにありや、ただ念仏にあり、ただ信心にあり、まことに信の内奥にあつて無限なるもの即ち浄土真宗。教を聞くも信ずるも行ずるも、本願の廻向、されば信、信を求め、称、称を求めて果を外に追わず、従つて信、信に満足し、称、称に満足す。（昭和の大悲劇は、神を信じて戦勝を外に求むる迷信に始まり、やがて、神の崩壊によりて終わる。民族の迷信亡びて神を失い、真神を知らずして右左に振動す。文化のレベル南洋土人の信にひとしく、而もこれを如何ともする術なし、我が此の頃の暗涙）信を証するものは信なり、称を証明するものは称なり。

それがそれ自体を証明するものこれを「真実」と言う。かるが故に君、静かに外に何もものをも求むるなく「すかさされたてまつりて地獄におつとも」念仏申したまえかし。念仏は本願の行である。如来それ自体の廻向表現である。親鸞と唯と念仏と三つあるが如きは概念のみ、親鸞即唯、親鸞即念仏、念仏即親鸞、念仏即正義、正義即念仏なるを「たゞ」と言う。

この唯行は親鸞の信である前に唯一の師教の発遣のみこと、「汝この道を尋ねて行け！」昨今の法話は聞書の「聖教読みの聖教読まずあり。」我等は教を聞くとき伝統を聞く、然るに伝統の教はこれを単なる頭脳を以つて受け取ることが出来る。しかしながら行者三定死のどん底に立つとき、はじめて発遣の声を伝統の教えの中に聞く、発遣は「汝！ 行け」の教命なり。伝統は死物、発遣は生きたる声、伝統は古きもの、発遣は今ここにある唯一の師の唯一の意志表示、必然の信順のみある教命（二三日前、この伝統と発遣の交渉を知つて嬉しきこと限りなし。）

師の一生をかたむけて選択本願念仏を明かにして、これを賜う。されば「弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せをかうぶりて信ずる外に別の仔細なきなり。」唯一の師教「この上は念仏をとりて信じたてまつらんと又すてんとも面々のおんはからいなり。」と我等を盲従、屈従、妥協、反逆等の牢獄より自由の天地に解放してしかも、信ずるより外に道なからしめたまう。身の幸喜ぶべし。生死海に満足あるこ

となし、信の内面に満足あり。信じて称するものは願生彼国の道にあり、願生浄土は選択本願の原理、されば願生彼国の道にあるものは、求めず期せざるに無限の徳の廻向によつて一切の問題自然に解決成満す。誤つて聖道の子となり、個々の道を個々に解決せんとするなかれ。例えば、自利利他の問題の如きも唯、願往生心に於いてのみ自ら解決す。その他一切は願生浄土に於てのみ与えられ解決せられるのが本願の徳である。

今日はこれにて擱筆します。お念仏申しませう、南無阿弥陀仏、御大事に養生肝要。

昭和二十一年五月二十七日 夜晃 藤原正義君

(一一二)

合掌………(中略)………随分長い間御会い致しませんが、御念仏は有難く御相続下さつていふことと存じます。誠に有難いのは御念仏のみであります。本部では例会や土曜会(高師と広師の学生)等有難いことが続いています。有難くても有難うなくとも御念仏の道を一貫させて頂くこと。念仏の有難いことを証明するものは念仏であり、信心の尊いことを証明するものは信心であります。でありますから正法を聞くこと自体に満足し、称名は称名に満足し、信は信自体に満足し、それ自体を証明するものを真実と云うのであります。この満足なきものは、果を外に求めて信と結ぶ(たとへば神と戦勝とを結んだが如し)を迷信と云うのであります。それがそれ自体に満足し、それ自体を証明する信の世界は、限りなく内に歩み、内に求めて生きるのであります。これ即ち、願往生の白道であります。この人のみ無有出離之縁の機を知り、無限の大悲に生きるのであります。必ず念仏一道にありて一日も心の食なくして生きることなきよう御精進下さい。御礼方々一口書き添えた次第です。末広その他の御同胞によろしく、村田の御母様によろしく御伝え下さい。敬具

昭和二十一年六月六日 夜晃

六字堂松里法契御中

書いているととしえ娘の家に早くゆきたくありません。

(一一三)

合掌 御無沙汰致しました。その後、御変わりなく御精進の御事と存じます。春の聖会には、ようこそ御来会下さいました。先日、団員名簿をよう送つて下さいました。なかなか出ないので困っています。鎌手には男子の中心がなく、佐々木道二郎君にも期待することが出来ないうえです。名簿を見ると佐々木君は、雑誌さえ不要に

なっているようです。誰か男子が立つてくれる迄は、支部設立も困難であろうと思われれます。

次に、わかめを有難う存じました。のしめが手に入らないのは残念でしたが、しかし、しばらくでもおいしく頂きました。お金を八十円も返して頂きましたが、あれでよかったですか。広島あたりではとても高いので、あれが二十円ではあまり安すぎます。御迷惑をかけたのでないかと心配しています。有難うございました。

分家することは、むずかしいとのこと。宿業です。どうすることも出来ない宿業です。貴女がかわいそうですがどうにもなりません。御念仏申しませぬ。御念仏の解決して下さい。むしろ気毒でかわいそうなのは、貴女ではなくて、御念仏のない五欲のみの人たちです。荷物が重くなればなるだけ、本願力に生きさせて頂きましよう。転重軽受と云つて、重きを転じて軽く受けさせて下さるのが、信心の智慧です。恒代さんには、み親も諸仏も善知識もついていられることです。勝とうとするから苦しいのです。まけてまけてまけぬきなさい。そして、御念仏に生きぬいて下さい。

先は御礼まで、御大事に御精進下さい。

昭和二十一年六月十一日

三浦恒代様

住岡夜晃

(二二四)

合掌 御手紙有難く頂だい致しました。御無事御精進が出来まして御結構です。何よりも俊子さんのところへ、よう行つて下さいました。ほんとうに、ようこそ、行つて上げてくれました。嬉しう存じました。それで、御褒美にはがきのかわりに、御手紙差し上げることに致します。

喉頭結核の悲しい御友達に、何よりも、み親とみ親のみくにあることを知らせてあげて下さい。私も、今日迄に、四人ほど、その病で亡くなった方を知っています。死が明らかである為、皆とてもよろこんで往生をとげられました。しかし、誰もかれも、其の方と同一の運命です。死を考えに入れないものの考え方は、生をも救つてはくれません。

俊子さんに会いたいと思うのに出来ません。どうすることも出来ません。それをおもうと、須磨子さんには会えています。不思議であります。

私と云うものは一人しかいない。それはそうだが、私は近頃、沢山な私がいる気がする。煙草をすっている私がをり、野菜に水をやってる私がいる。御聖教を頂いている私がをり、念仏している私がいる。煙草をすっている私は、そこらに一ぱいいる人ら、煙草をすっている人らと同一であり、野菜に水をやってる私は、お百姓と同一である。私の外に私がをり、その外に私がをり、その又外に私がをる。又、私の内に私がをり、その奥に私がをり、その又内に私がをる。その内の内、奥のおくに、南無阿弥陀仏がまします。み親は私ではない。私ではないが、しかし、私が私とおもう私

よりも、もつとほんとうの私のみ親である。この私の外なる我を小さい私と云い、内なる私を大きい私と言う。邪見な人と言うのは、他人の上に小さい我を引き出すことの上手な人のことである。小さい我、貪欲や瞋恚や愚痴の我を引き出されるほど辛い嫌なことはない。尊い人と言うのは他人の上に大きい我を引き出すことの上手な人のことである。教育的な感化力の強い人、聖賢と云われる人がそれである。この大きい我を引出され見出す時、人は感動するものである。新聞を見ていてさえ感動するのは、大きい自己を引出されているのであり、嫌なおもいがする時は、小さい己を強制的に引き出されているのである。もし、大きい我を見出さしめられる時は、同時に、自然に、小さい我を発見せしめられる。機の深信と云うのは、こうした自己内観が極限的に、おしすすめられた相を内観することである。如来を発見する者は、同時に、畜生道の我、餓鬼道の我、地獄道の我を発見する。この発見は先にのべた。人から無理に小さい我を引き出されたのではなく、み光によつて、内に発見せしめられたのであるから、懺悔感謝の有難い心においてである。畢竟、人格の大小深さは、この明暗（大小）の振幅によるのである。大の限は如来であり、暗の底は、必墮無間（五逆謗法）の我、無有出離之縁の我である。然るに、暗の我を照し出すものは如来のみ光なるが故に、そのみ光は、同時に、又、闇の我を救う光である。悪人正機の宗教の内的光景知るべきである。――（毎夜の本部での法話）

貴女の為に一時間の時間を割きました。お念仏の生活の深まれかしと念じます。

近頃は、毎土、日には賀茂郡に行っている高師からと、広島師範とから沢山聞きに来られて嬉しくおもっています。希くば、須磨子さんは何時までもく／＼続けて精進する人であつてほしい。沢山な女先生たちが何時の程にか消えていなくなつてしまいました。御精進下さい。

夏の講習。時、八月一日―七日、七月三十一日、集合、

題、観経真身観（続） トテモアリガタイトコロデス。

昭和二十一年六月十二日

夜晃

安永須磨子様

（二二五）

合掌 おぼゝんも義彦君も御元気で結構です。さて此の度は絹が病氣をして義彦君には大変な御迷惑をかけました。又おぼゝんには、可愛い孫とはいいなながら六十日と言う長い間御苦勞をおかけ致しまして、誠に相すまぬこととございます。本部は急ににぎやかになつたのに対して、因島の家はさびしくなつたことだと存じます。御二人の御親切のほど有難うございます。厚く／＼御礼申し上げます。おかげで大変元氣になつて帰つて来ました。十三日帰りますと、夕方にはもう畑について出ました。十四日には私が出るのについて、午前は二時間、午後は三時間畑で働きました。

そして夕方にはごはんがおいしいと云っていました。今日も朝から畑に出ています。もう全く病人ではなく健康体です。御安心下さい。

帰る時には、誠に立派な鯛を頂きまして近頃一寸見たこともないほどの逸物です。早速夕食には、本部全員と絹の快復祝いを致しまして御馳走になりました。こちらからこそ御礼を持つてゆくべきに、何一つ差し上げず、却ってそちらから頂いて恐縮しています。厚く御礼申し上げます。

おぼゝんにも義彦君にも長い間御会いせぬので、御会いしたくおもっています。いづれお礼に参上致すつもりです。前田先生にも山々よろしく御伝え下さい。いづれ御礼に参上致すつもりでいます。皆様と御法でつながる時が早く来ればと、そのみ待っています。

義彦君、絹が長い間御厄介になったことが君の上に、いよく念仏一道に生きぬいてくれる助縁となったであろうことを嬉しく思います。いよく一道を変らざる相で一貫して下さい。御念仏の一道を歩む人が一番立派な人である。昨日も高師の梶井教授が聞きに来てくれた。とてもよろこんで聞く人である。この人と一緒にいるといくらでも話が出る。それを一々肯いて喜んでいいる。であるから英語科の教授であるのに、倫理や哲学科の学生が同教授を訪れるのである。倫理の学生が倫理の教授に満足せず、哲学の学生、哲学の教授に満足せずして、却ってほんとうの人間を求めているのである。正法の響く器、正法の生きる人、そこにのみほんとうの人格がある。

昨夜の御法話の一節

御讚題「仏法には明日と申す事ある間敷候。仏法のこと急げく云々」(三〇ノ十六)

一期一会の意である。静かにこのおことばを頂いていると自分の心のすがたが見えて来る。「明日はない。」そんな心の持ち合せがあるだろうか。貪欲は明日を来年をと、希望を明日にかけてのみ生きてゆくのである。それより外には生きる道知らぬ。それが我が心の全てのようなのである。見れば見るだけ「明日はない」心とは遠いのが我が心の相である。いかゞ頂くべきであろうか。

静かにお念仏しつつ心の相を見ると、その時、見ている私と見られている相とある。見ているのは御念仏の心であり、見られる心は明日へくと生きんとする心である。精進しても、徹底しても、どうしても、見ている心と見られている心と、これが無くなるのでなくて、いよくそれが明かになるばかりである。この見ている心、即ち超越的立場を与えられた心である。この超越的立場を与えられることより外に救いはない。その心を与えられるが故に無有出離之縁の自覚に至るのである。

「明日はない」生活とは誠に御念仏の生活のことである。私の心根を「明日はない」と思わすようにしようとしても、万年たつてもなつてはくれない。明日のない日は死である。暗い愚痴より外はない。そこで心根をなおして念仏するのでなくて、念仏を聞信して生きさせて頂くのである。すると、念仏することが一期一会の意に生きることである。念仏に生きて、じつと煩惱のすがたを見せて頂くのである。見られているのが真の自己か、見ているのが誠の我が。

有難い念仏の人はたいがい死に至っても動ぜず、有難い往生をするようである。その明日のない時がせまった時、明日をあらしめたい心がなくなつたのではない。しかし願往生心は超越的立場に生きているのである。であるから歎異抄の九章の如く、煩惱の心を凝視しつつ、しかも動ずることなく念仏するのである。救われるとは超越的立場を与えられることである。そしてほんとうに道に合せぬ無有出離之縁の我を見ることである。助からぬことを知つた者こそ助けられた人である。明日のない生活とは念仏の生活のことである。煩惱の整理によつて生れるのではない、念仏の徳である。

長くなつた、今日はこれでおきます。おぼゝんよ、御念仏申しませう。有難うございました。

義彦君も暇をつくつて帰つておいで、御法ぬきで生きてはならない。君の精進が君の周囲をみ法の華園にして下さるであらう。ではお大事になさい。十五、十六日、二日ばかりで書きました。さよなら

昭和二十一年六月十六日

夜晃

石井おぼゝん様 義彦様

追伸 体は、ほつたらかしますがーという中になか／＼用心していますーだん／＼快いですから御安心下さい。七月からぼつ／＼出ようかとおもっています。

(一一一六)

合掌 南無阿弥陀仏

長いこと御会い致しませんが皆様御変わりはありませんか、先日は御見舞有難う御座いました。厚くお礼申し上げます。家内も元気になつて十三日に帰つて来ましたから御安心下さい。

今頃は農村は忙しいことでしょう。忙しいと御念仏もけだいになりがちですがどうか今日一日御念仏申させて頂きましょう。御念仏ほど尊いものはない。しかし称えて一貫せぬものにはわからない。御念仏の尊いことを証明するものはお念仏であることは、砂糖の甘いことを証明するものは砂糖であると同じことです。これを真実と云うのであります。それがそれ自体を証明するものを真実と云うのであります。

本部の復興もぼつぼつ進んでいます。今頃は台所や風呂場をやっています。吉見君はとてもよく働いてくれます。春の講習頃からいよ／＼御念仏を喜んで朝は早くから夜はおそくまでとても／＼よく働きます。皆おどろいています。それに毎夜々々御法を聞くのを楽しみにして御念仏もろともに働いてくれます。御念仏の尊いことが思われます。私が加計にゆく時はつれて行つてくれと云います。よく働いてくれるからつれて行こうとおもいます。

津浪の野田さんはかわいそうなことでした。しかしその為本部にまいり御念仏の子になつてくれたことは有難いことです。ようこそすすめてあげてくれました。いよく御念仏申しましょう。

御念仏中心の生活でないこの世はついに愚痴におわります。今の世は旦那も百万長者も幸ではない。御念仏の身の世界一の幸者であることを喜ばして頂きましょう。七月になつたら御会いしたいとおもっています。お大事になさい。

昭和二十一年六月十八日

住岡夜晃

島田屋御一同様

同胞に会つたらよろしく云つて下さい。この手紙に書いてあることをおはなしして下さる。

(一一七)

合掌 御手紙拝見致候処、腹膜の水とれずとのこと、随分御要心被下度候。秋作も十日間も本部に帰らず、やつと昨二十三日に帰り、委細相わかり申し候。この際必ず□を引き上げ、広島に帰来致され候ことが本望なれども、目下は全く転入を許されず候間、なるべく広島に近き便利の地に引上げ、宗教の為、団の為に御働き下され度く、いよいよ本団も活動致すべき時と相成候に付、この度本団総務を増員三名と致すべく其の一人となし候間可然御了承被下度候。これ迄の如く政治方面のことは一種の道草につき、これからは純正宗教家として専心御精進相成度、それにはこの度家主の医師の復員は全くよきことにて、必ず引上げ決行に致度、此上□にとゞまるが如きことは許されざることに御座候。先は要々のみ。

昭和二十一年六月二十四日

夜晃

蘇晃様

- 一、絹は六月十三日に帰団、熱もなく食事も普通と相成候、御安心被下度。
- 一、小用と音戸高須との中、高須を取るよう決定、秋作に然るべくすすめおき候、何彼の条件好都合に候、音戸高須なれば、広島から呉に、呉からバス、渡し舟にてゆかれ、陸続きと同一に候。子供の教育にも至極便利に候。
- 一、小生も体だんく、良くなり候に付、七月初旬、加計支部に、中旬河内支部二十週年に参り候。ついて来たくは御座なく候か。
- 一、鶴枝さん、お薬有難う。
- 一、どさくさしてお念仏を忘れ、麁悪なる日々を過したまうこと勿れ。静かに内に願往生の一道に生きるためにはこの度は絶好の機会に御座候。

(二二八)

合掌……(略)……お念仏させて頂く時、限りなく広大な利益が与えられることを現世利益と申します。その利益の主なるものを撰取不捨と言います。撰取不捨とはみ仏の心に依つて、私自身が撰め取られることであります。生死動乱の人生のさ中に在りて、寂静の彼岸のみ親の心に依つていただき取られることであります。

貴女は今自己の病を業として受け取つて念仏させて頂くこと、はるかに浄土のみ心に依つていただけること、そこにこそ撰取不捨の大悲が知らされることです。「生死の人生に在りながら浄土を憶う心」「それは浄土に在しますみ親の生死海中の愛子を念じたまう心であつた。」これをこそ、撰取によつて、念仏の子はその信心が金剛心となるのです。金剛心であることは、念仏の子に取つては唯一の生命の堅固なることを示され、証明されることであります。

生死は無常です。その中で金剛心の行人はやぶれずかたぶかずみだれぬ御念仏に生きるのです。一切の業苦を念仏の中にあわせて頂きまして、はるかに撰取の慈悲に生かされましょう。それが御念仏です。

秋の虫が啼いている。啼く所に秋がせまつています。念仏の子が念仏する、そこにみ親の撰取があります。

昭和二十一年八月十六日

栗山俊枝様

夜晃

(二二九)

合掌 御手紙有難う。矢掛の母上御病気の由御心配のことです。しかし大事に至らぬ様子で一先安心です。山口県の講習会は大変盛会でした。講題は浄土真宗の開顯。一二聞いておかねばならぬこともあります。何処も唯愁歎の声のみに満ちた人生、一人一人狂える理性によつて動いてその限界を知らず、この理性の限界を超えたる不可思議の仏智の領域に入つて選択本願に生かされることが出来ない。業苦を荷いて輪廻のはてなきを知らず、そうした人生の諸相をながめて念仏している政治の念仏の心を憶念して、筆をとつたことである。正法を聞く時は念仏の尊さを正顯し、世相は念仏の尊さを反顯しているに過ぎぬ。あるがままの人生を受け取りつゝ念仏申すべきである。内に内に、内は光、外は闇。念仏を主とし煩惱を客人とせよ。無碍の一道がそこにある。

何を見ようと何を聞かうと、それをそれと領解すべし。おどろくべからず、全て仏かねて説きおきたまえることである。劫初久遠よりの御命は無明の黒闇を貫いて流れて、今我等の上に念仏となりたまう。過去にはいのち、未来には光。いのちは発遣し、光は招喚す。(このことわからなければ会つた時語る。)発遣招喚のみ生死海にあつて虚仮ならぬ真実。

一生聞法精進のこと何より大切です。堅く御決意なされたし。一人位は如来浄土の願心に生きぬいていて日本の柱石となる青年があつてもいい筈。

……………(削除)……………

今の日本に名利等成就して何かはせん。何よりも体に気をつけて勉強すること。我輩は五日より花岡の法事の会座にゆき、十日より石州路に赴き、月末帰団す。未だ体十分ならねども、忘れられぬ「祖国」の二字。起つて正法を宣説聴聞すべし。祖国に報ずるの道即ち祖国復興の道、ゆめゆめ「念仏して己を充実し日本国土の底に埋るゝを本懐とすべし」の覚悟を忘るべからず。あなかしこく。

昭和二十一年八月三十日

夜晃

山田政治君

(一一〇)

合掌 この度はせつかくお宅にまいりましたのに御病気で御会いすることが出来なくて残念でした。承れば御大病にて御苦しみとのこと、さぞ御苦しいことでしょう。どうか早く快くなつて下さるようにと日夜祈つています。どうか快くなつて下さい。そしてお会い致したい、お話が聞いて頂きたい。

み仏様はあなたをはなれず何時も光明の中にてらして下さいます。念仏してくれ。衆生が念仏すれば必ず助けられるように本願が成就されてある。衆生が助ければ親が助かる。衆生と仏を運命を一つにして南無阿弥陀仏の中に助けられるように成就されてある。念仏してくれ、念仏すれば往生する。永遠の故郷はみ親の浄土である。み親の浄土に向つて今日出発するものが念仏の衆生である。

念仏の衆生の上に如来の願力は打ちこまれてある。この願力に乗托して自力をはなれ、安らかにまかせきつて御養生下さい。生も死も何にも彼も全て如来にまかせきつて念仏して心安らかに御養生下さい。如来大慈悲に生かされいだかれて心安らかに御休みなさい。

業があれば生き、業がつきれば死にます。生きるや南無阿弥陀仏、死するや南無阿弥陀仏。生きるも死ぬるも宿業にまかせて大願の船にのつて心安らかに御念仏下さい。御法のことでは静子さんに御きゝになれば仏の有難いことはわかるでしょう。それでもわからないことがあれば顯正寺さんに聞いて下さい。

御念仏に生きて下さい。そのみ念じています。清子さんも御念仏して御介抱して下さい。御大事に

昭和二十一年九月二十一日

住岡夜晃

下岡仁三郎様

合掌 南無阿弥陀仏……(略)……仁三郎君が御往生なさいましてもう十八日たちました。皆様いよく御さびしい事で御ざいましょう。子供に死なれたほどさびしい苦しい悲しいものはありません。人生の一番の苦しみであります。悲しむより苦しむより外ありません。しかしどうか御念仏申させて頂きましょう。泣いてもいゝが御念仏の中で泣け。苦しんでもいいが御いのちの中で苦しめ。それがたった一つのほんとうの生き方であります。幸に仁三郎君はお念仏申されましたとの事、こればかりは悲しい中の嬉しいことでもあります。今はたゞ御念仏より外には仁三郎君に会われる道はありません。御念仏一道に生きぬかして頂きましょう。御念仏一道に生きさせて頂く時、我が子だとおもった仁三郎君が尊い善知識であったことがわかります。あとにのこられた皆様は仁三郎君の死によつていよく無常にさめ、心を一つにして御精進下さい。そうなたた時、仁三郎君の死は決して死ではなく、尊く生きて下さるのであります。

あの世とこの世とかわれども一つの南無阿弥陀仏の中であります。皆様御大事に御精進下さい。

昭和二十一年十月七日

住岡夜晃

下岡久吉様